

令和7年6月27日

No. 4



発行責任者
校長 有崎 美紀

自ら伸びる



府中中央小学校ホームページ <http://chuosho.fuchu-town.ed.jp>

子どもを見る“まなざし”の研鑽

ある朝、地域にお住いの女性の方が、校門に立っている私に声をかけてくださいました。いつも横断歩道で見守りをしてくださっている方で、1年生の交通安全教室や3年生の自転車教室でもご指導してくださる方です。

その方が、「今朝、泣きながら登校している男の子がいましたよ。」と教えてくださいました。どうやら朝起きて、お母さんと喧嘩をして、心がすっきりしないまま登校していたよう。その方は、ひとしきり男の子の泣いている理由を聞いて下さったうえで、次のような会話をされたとのこと。

女性：泣いていた訳はわかったよ。だれかにそのことを聞いてほしかったんだね。

男子：うん。

女性：お話できてよかったね。

男子：うん。

女性：もう大丈夫？

男子：うん。

女性：いってらっしゃい。

男子：いってきます。

「だれかに聞いてほしかったんだね」という切り返しに感動し、そのことを伝え、「日々、子どもたちと出会い、どう声をかけるか考えています。毎日子どもから学んでいます。」との言葉！子どもを取り巻く地域の方も、子どもを見る良き“まなざし”の研鑽をされていることに胸が熱くなりました。

今年度の学校経営理念は、これまでの「学校は子どもが育つ土壌である」に加え、「地域も子どもが育つ土壌である」としています。つまり、本校が“子どもを真ん中にした地域づくり”の核となっていくためにも、教員も保護者も地域の方も、共に「子ども理解を学び合う関係」に成熟していくことが大切であることをあらためて認識した出来事でした。

大切な命を守るために～心肺蘇生講習会～

6月11日（水）に府中町消防本部の方にご指導いただき、心肺蘇生講習会を行いました。水泳の授業を見守ってくださる保護者・CSサポーターの皆さんも一緒に講習会に参加してくださいました。17日（火）から始まった水泳の授業。CSサポーターさんの協力もいただきながら、安全に授業を進めていきます。



水泳学習が始まりました

6月17日（火）から水泳の授業が始まりました。どの学年も初回の授業では、プールの約束や入水の仕方などについて学び、その後、水に慣れることを目標に学習を行いました。小学校のプールに初めて入った1年生の子どもたちは、「楽しかった。もっと入りたい。」「小学校のプールは大きいよ。」と大満足でした。

水が冷たくて、気持ちいいよ。



異学年交流（たてわり出発式・体力テスト）

1・6年生と2・5年生がペア学年で交流しながら、6月5日（木）に体力テストを行いました。高学年は、低学年にやり方のお手本を見せたり、コツを教えたり、記録を記入したりしながら、優しく接することができました。低学年も、高学年のお兄さん・お姉さんを頼りにしながら、自分の力を出すことができました。

また、6月12日（木）の朝は、たてわり出発式を行いました。1年生から6年生までの班の仲間と自己紹介や掃除場所の確認を行い、その後ゲームをして仲良くなりました。

これらの活動は、異学年交流を通してリーダー育成と人と関わる喜びを得ることがねらいです。今後も「はちの子デー」の行事や、たてわり掃除等で交流を深めていきます。

足をしっかり押さえておくよ。がんばれ！



これからよろしくね！



「じまんの俳句」令和7年度第2回代表作品

はがぬけた いたくなかった 一本目

一年 代表児童

一年生にとって歯が抜け替わるのは、よくあることです。○○さんは、きつと「歯が抜ける時、痛いかな」なんてドキドキしていたのでしよう。でも意外とすぼっと簡単に抜けてホッとした、そしてうれしかった気持ちがこの俳句から伝わってきます。「一本目」という最後の言葉も効果的です。

えんぴつと 雨音重なる 授業中

四年 代表児童

雨をテーマにした俳句はたくさん集まりましたが、その中でも○○さんは雨音に着目し作品を作りました。鉛筆を走らせる音と外から聞こえる雨音が重なるその瞬間をうまくとらえています。部屋の中で静かに耳を傾けると雨音が響いてきて、その音と何かの音が重なる、そんな瞬間をうまくとらえていますね。まさに自分だけが見つけたとっておきの瞬間と言えるでしょう。

ゆでたまご 自分の好みは 十一分

五年 代表児童

五年生は家庭科の授業で、ゆでたまごの実験をしたそうです。何分ゆでるとどれくらい固さのゆでたまごになるか調べた中で、作者の○○さんは、自分の好みは「十一分だ！」と発見したこと、そしてその時の驚きを俳句にしています。十一分と言い切っているのがとても効果的な作品です。さて、十一分ゆでると、ゆでたまごはどんな固さになるのでしょうか。試してみたくまりました。

第1回クラブ活動

今年度初めてのクラブ活動を6月18日（水）に行いました。本校では18種類のクラブ活動があり、4年生以上が参加します。地域のサポーターの皆さんにゲストティーチャーとして来ていただいているクラブは、環境、手芸、料理、モルック、手話、折り紙、絵手紙、ボードゲーム（囲碁）クラブです。早速、いろいろと教えていただきながら活動を行いました。異学年や地域の方々との交流を通して、楽しく活動するとともに、協力し合う態度が育ってほしいと願っています。



折り紙クラブ



ボードゲーム（囲碁）クラブ



環境クラブ



絵手紙クラブ

5年生防災講話

6月18日（水）と19日（木）に、総合的な学習の時間「防災～ともに生きる～」の学習で、府中町災害サポート隊の登田さんと小島さん、府中町消防本部の久保田さん、社会福祉協議会の檜山さんに来校いただき、西日本豪雨災害時の経験や思いをお話していただきました。大切な命を守るため、自分事としてとらえ、つながり作りが大切であることを確認し、これから自分たちにできることは何なのかを考えました。



第1回学校運営協議会

本校は、コミュニティ・スクール指定校です。コミュニティ・スクールとは、学校運営協議会を設置している学校のことです。地域・保護者の代表の方に学校運営に参画していただき、学校の取組や取組の進捗状況、地域や保護者との連携について協議します。地域と学校が同じ方向目標をもって、力を合わせて子どもたちを育むための仕組みです。

今年度は、6月11日（水）に、第1回学校運営協議会を開催しました。今年度の学校経営目標や具体的な方策等について学校から説明をさせていただき、その後、子どもの育ちや学校の取組等について熟議を行いました。熟議の中で、今年は次の4つのテーマを指針として学校を見取り、コミュニティ・スクールとして協働していくことを確認しました。

【4つのテーマ】

- ① 自分も子どもを中心において関わろう（委員自身の倫理観）
- ② “失敗を許容しながら”という学校の在り方に注目しよう（評価の中核視点1）
- ③ 学びの結果ではなく“途中”にどのような「自ら伸びる」の学びが起こっているかに注目しよう（評価の中核視点2）
- ④ “学びの集中感・緊張感”がどのように生み出され高まっていっているかに注目しよう（評価の中核視点3）

教育活動を充実の図ることをねらいとして後日、保護者の皆様にも、学校評価のためのアンケートを実施させていただきますので、ご協力をお願いします。なお、学校評価表の詳細につきましては、本校のホームページ（<http://chuosho.fuchu-town.ed.jp>）に掲載していますので、ご覧ください。



内容につきましては、以下の通りです。

第1回学校運営協議会 報告書

開催日：R7.06.11(水)9:15-11:45

文責：曾余田順子・R7.06.16

1 学校長の学校経営観：有崎校長より

- ・学校経営（学校づくり）は、「山に登ったら、次の山が見えてくる」の繰り返しである。
- ・本校は、町内一の規模であるが、「学校を安全に」だけではなく「この地域にある学校として何を大事にしていけないといけないか」を問わなければならない。
- ・公立学校であり人が変わっていくので、前任の思いを受けて、後任につないでいかなければならない。
- ・「子どもにどんなまなざしを向けていくか」を地域とともに問うていくこと、「成熟した地域」になっていくのではないか。
- ・子どもの事実課題を見つけ、子どもと協働して解決していく。たとえば、障害をもつ児童に対して、いじめやからかいが起きても不思議ではない場面でも、問題が起きなかった。これは、その子どもの「みんなといっしょにやりたい」という「ねがい」をかなえるために、どういう学びが、学級・学年として必要なのか、あらかじめ問い、仕組んでいった結果である。
- ・本校の教育の方向性としては、派手さを求めるよりも、当たり前に見えるなかに、そうした教員の努力がある。

2 学校参観および学校評価の説明

学校参観の後、学校経営計画（学校評価）に基づいて、以下の内容が説明された。

（1）今年度の方向性：白石教頭

- ・学校経営のキーワード：「問い直し」。
- ・前年度から今年度に至る経営課題（現状）：「めざす姿を子どもに当てはめようとしている」
- ・今年度の方向性（経営上の方向目標）：「自分たちが本当に追求したいことを、自分をかけて追求できる“集中のかかる学級”へ。」

（2）各柱の説明：各主任

- ・柱a：枝正教務主任 ・柱b：綿貫研究主任 ・柱c：森本生徒指導主事・亀竹保健主事
- ・柱d：下田主幹教諭

3 学校運営協議会委員による熟議

（出席者）曾余田・松本・田中、濱田・徳味（PTA）、小濱・大場・竹原（CS事務局）、
相星（府中緑中学校長）、有崎・白石・下田（府中中央小学校）

（陪席） 枝正教務主任、森本生徒指導主事

（1）第1回学校運営協議会の目的

学校参観・学校経営計画の説明等から学校経営の方向性に関して対話・討議し、

- ① 学校運営協議会としての本年度のテーマを析出する。
- ② コミュニティースクールとして学校経営計画を承認するか否かの意思形成・意思決定を行う。

（2）委員長・副委員長の選出

委員からの提案で以下の通り承認。

委員長：小濱、副委員長：大場

（3）学校運営協議会（熟議）の方針（小濱委員長）

本校の学校教育目標は「自ら伸びる」。これは大人も同じ。思いを語れる協議会にしていきたいと思います。

4 協議（熟議）の概要

（１） 学校の内実を協議会として共有する

- ① 学校参観、先日の運動会の参観等より、各委員による学校の見取り（年度を越えての各学年の育ちの姿、育っている教師の姿）、それらに対する学校側の取組の内実や懸案となっていることが語られた。
- ② 委員の見取りに対する学校側の応答によって、教師がどのような経験によって“殻をやぶる”のか、本校における教師の育ちに関するエピソードが、具体的に語られた（有崎学校長・枝教務主任・森本生徒指導主事）。
- ③ ①②に関連して、有崎校長より、本年度は臨採や若い教員が多く、ミドルが“かみくだいて”若い人に伝えていること、教育技術（“当たり前所作”）の継承が難しく懸案となっていること、“教師も子どもと同じ学びをしないといけない”ことが語られた。
- ④ “教師も子どもと同じ学びをしないといけない”は、保護者も同じであるとの声が上がった。

（２） 子どもの育ちや学校の取組みを保護者・地域と共有する

- ① 授業だけでなく、縦割り班の活動などで学んで成長している子どもの姿を親に見てほしいということが出された。
- ② 運動会に関しては、先生との一体感があり感動したこと、自分も“気持ちのよい声かけ、心に響く声かけ”を心がけていること、“自分も子どもを中心において、伝わるようにやっていきたい”ということが語られた。
- ③ 先月の運動会に対しては、“派手さ”を求める保護者の声があったことが、学校から語られた。
- ④ 親の子どもをみる“まなざし”に関して、CS事務局の委員から、“保護者は、集大成（としての子どもの姿）を求めるが、（取組みの）途中が、「自ら伸びる」ところ”であること、“それは、もっと伝えていかないと、保護者はわからない”、“結果よりも、「なぜそうなったか」が大事”ということが語られた。
- ⑤ “親子で一緒に考えることで、伝えていく”、“先生の思いと一緒に立っていく”ことの必要性が指摘された。

（３） 学校経営計画（学校評価）の主旨を議論する

- ① 府中緑ヶ丘中・相星校長からは、「子どもがやるべきことがはっきりしていて、ムダがない」との見取りが語られ、評価表の「教師のまなざし」の中身がどうなっているかとの質問が出された。
- ② 有崎校長・枝正教務主任から、評価に合わせた内容にすること（分掌で検討）、どれだけ学びを得たかに関して子どもの記述のなかで汲み取ること（研究授業の後はアンケートをとっている）、さらに、子どもから学びぼう変容したか研修をしないといけないこと、が応答された。
- ③ CS 事務局の小濱委員からは、学校経営計画の柱の説明に関して、主任の話が響いたこと、前回の伝わり方とは違い、先生方の思いが伝わったとの評価がなされた。
- ④ 曾余田委員から、先ほどの学校参観で教室掲示（目標や運動会の振り返りシートなどの掲示物）を観たが、今年度学校経営計画でめざしている目標のあり方と、先生方の理解が違っているのではないかと（文言は変わっているが、先生方の理解は昨年通り）、という疑義が出され、次のよう方向づけが提案された。：たとえば、運動会の振り返りシートでいうと、結果を書かせるのではなく、プロセスを綴ったものを掲示しておく、子どもたちもそれを互いに見るだろう。子どもたちが互いに交流し合う中で、学習集団は創られていく。先生方も、結論にコメントを書いているということは、その途中を見ているだろうから、「ああでもない、こうでもない」と子どもたちがやり取りをしているところを見取ってコメントを入れるなどする。
- ⑤ ④に関して、PTA の濱田委員からは、“結果も大事ではあるが、行程が生きていく力へと繋がっていく”と、本年度学校経営として意味づけ・価値づけすべき方向性が、重ねて指摘された。

PTA の濱田委員からは、学校経営計画に関しては、「学習集団として成熟していくためには

- ③ “失敗”を許容しあう“やさしい”関係性が構築された支持的風土を創って終わりではなく、自分たちが本当に追求したいことに自分をかけることのできる“集中のかかる学級”へとフェーズを上げていく必要がある。失敗したり思いや意見がずれたりとコンフリクトが発生したときこそを問い直しの契機とし、お互いの考えを交流させ、授業や行事の中で“学びの集中感・緊張感”を高めていくことが「自ら伸びる」意思を形成することに繋がる。」、この部分が大切だと捉えたと経営計画の価値づけがなされた。学校運営協議会のあり方がわかり、以前は、ただ教えてもらっただけだったが、現在は、“そのためにこうやっていきます、そのために何をしていたらいいか”が明確になってきている、子どもの事実に向き合ってみて、2回目・3回目（の協議会）がどうなっていくのかが楽しみであり、“挑戦していく学校になっている”と評価された。
- ④ 「学びの集中感・緊張感」綿貫研究主任が具体的に授業場面を語ったことで理解が進んだが、は難しい言葉であることが指摘された。

（４）学校運営協議会としての本年度のテーマ

以上の熟議を踏まえて、以下４つのテーマが析出された。本年度の学校運営協議会は、この４つを指針として学校を見取り、コミュニティースクールとして協働していく。

- i. 自分も子どもを中心において関わろう（委員自身の倫理観）
- ii. “失敗を許容しながら”という学校のあり方に注目しよう（評価の中核視点１）
- iii. 学びの結果ではなく“途中”にどのような「自ら伸びる」の学びが起こっているに注目しよう（評価の中核視点２）
- iv. “学びの集中感・緊張感”がどのように生み出され高まっていつているかに注目しよう（評価の中核視点３）

（５）本年度の学校経営計画の承認に関して

PTAの濱田委員の“挑戦していく学校になっている”という表現に象徴されるように、子ども・教師・かかわる大人が「自ら伸びる」土壌としての学校経営を、学校自ら「問い直しながら」、創り出そうしている。よって、学校運営協議会として、令和７年度の学校経営計画を「承認する」ものとする。

以上